

物体を表すアメリカ手話の類似構築モデル におけるメトニミーの関与について —認知意味論による手話研究への貢献—

島 田 浩 之

序

手話は言語であるか、それとも単なる手まねや身振りの類であるのか。本稿では、手話は体系を有する言語であるという前提のもと、手話表現の生成までの一連のプロセスを認知言語学的観点から考察してゆく。そこでは Taub (2001) で提案された「類似構築モデル」(Analogue-Building Model) を援用し、手話表現成立までの様々な心的操作やそこから生まれたイメージについて考察する。このモデルがいかに手話表現の文化的差異を説明する可能性を含むかを探る。研究対象はアメリカ手話 (以下 ASL) の中でも物体を表す手話表現であるが、心的操作のプロセスにおける各言語間での操作されるイメージの異なりを比較するために日本の手話 (以下 JSL) も取り上げる。またその心的操作の根底には基本的認知能力が影響していることも示唆する。

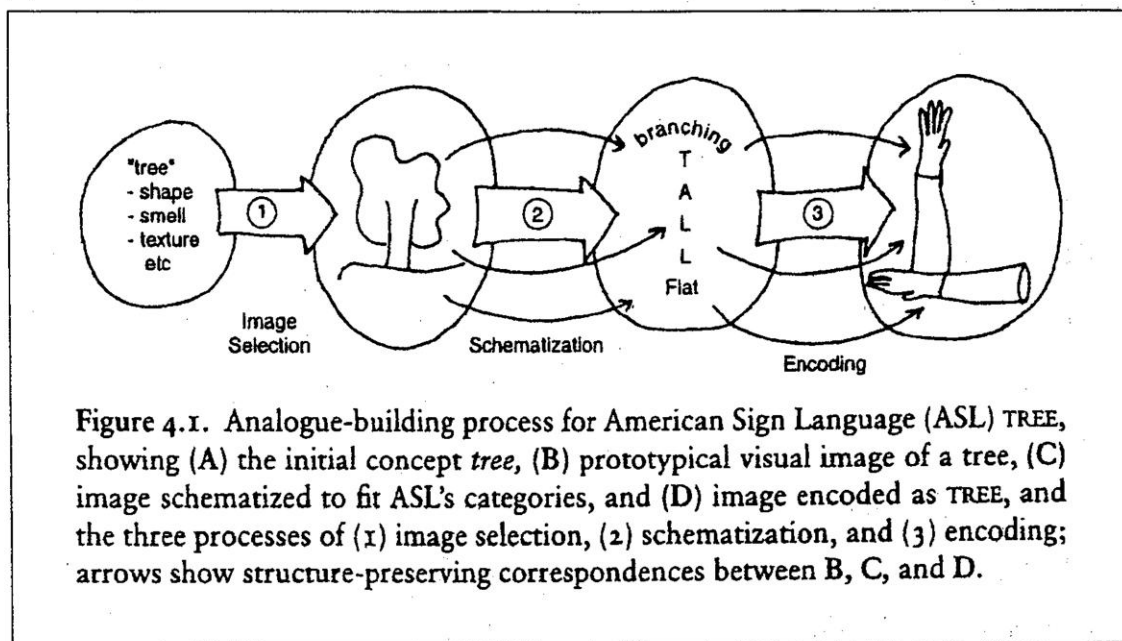
以下、本稿の展開は次の通りである。第1節では Taub (2001) をもとに「類似構築モデル」の解説と、手話表現の恣意性、メトニミーとう認知過程について触れる。第2節では、ASLとJSLの物体を表す表現を比較しながら、いかにして同一の意味についてASLとJSLで表現の一致や異なりが生じるかを考える。

1. 先行研究

1.1 「類似構築モデル」(Analogue-Building Model)

Taub (2001) では、手話や音声言語において言語形式と指示物 (referent) との間に多分に類像性 (iconicity) が存在することを詳細に説明している。その類像的言語形式を構築する心的プロセスを、「類似構築モデル」(Analogue-Building Model) として提案している。この類似構築モデルにおいて、指示物から手話表現の生成に至る一連のプロセスを、①イメージの選択 (image selection), ②スキーマ化 (schematization), ③記号化 (encoding) の3つの過程²⁾に分けている。以下にアメリカ手話 (以下ASL) のTREE³⁾を例に類似構築モデルのそれぞれのステップを説明する。

[図 1]



[Taub(2001:44)]

類似構築のプロセス (analogue-building process) ではまず、典型事例に代表される全般的な概念 (entire concept) (図 1 における (B) の段階) を表示するために、指示物が持つ様々なイメージの中から感覚的イメージの取捨選

択が行われる。概念は本来、多モード的 (multimodal) であり、例えば初期概念 *tree*⁴⁾ (図 1 における (A) の段階) には、木の形状などのような視覚的イメージや幹を触った時に感じ取る触覚的イメージをはじめ、木が風にそよいだ時に起こる音響的又は嗅覚的イメージ、さらには木の発育に関わる全ての百科事典的情報 (encyclopedic information) や、個人が持つ多種多様に存在する木の種類に対する一つ一つの個人的経験までもが含まれる。そのような雑多なイメージの中から最終過程で ASL としての言語的表示 (linguistic representation) を産むべく、まずこの最初の過程でイメージの選択が行われる⁵⁾。[image selection ; 図 1 における①のプロセス]

次の過程では、イメージの選択によって抽出された「木」全般に当てはまるような適切なイメージ (appropriate image)⁶⁾ (図 1 における (B) の段階) が ASL によって取り扱うことができる形態であるようにするために、さらにイメージの絞込みが行われる。初期概念 (A) はイメージが過度に鮮明すぎるため、そのイメージを最終的に ASL で言語化するにはイメージが具体的すぎるので、イメージの限定 (modify) が行われる。このようなイメージを希薄化させるプロセスを「スキーマ化」(schematization)⁷⁾ と呼ぶ。例えば、イメージの選択によって抽出された二次的概念⁸⁾ *tree'* (図 1 における (B) の段階) が、地面・木の幹・枝・葉・それらの形状を含むものであったとしよう。ASL の形態素においてこれら全ての要素を (同時に) 言語形式として表示することは最終的にできないので、ASL で最も重要とされる 3 つの要素 (地面, 幹, 枝) に限定される⁹⁾。枝に当然付随しているであろう葉はこのスキーマ化の過程で捨象されたと考えることができる。

[schematization ; 図 1 における②のプロセス]

最終過程では、スキーマ化によって得られたイメージ (図 1 における (C) の段階) を手話 (図 1 における (D) の段階) で代用するプロセスが起こる。これが「記号化」(encoding) のプロセスである。例えば、スキーマ化によって導き出された三次的概念 *tree*¹⁰⁾ (図 1 における (C) の段階) は「幹・枝・地

面」を表す集合体であったが、それらをそれぞれ「一方の¹⁰⁾腕を立てた状態・一方の腕の上に乗る指を開いた手のひら・他方の手を伏せた状態」というASLで慣習的に認められている意味的カテゴリーによって記号化するのである。この過程を経て、形式と意味との類像的言語ペア (iconic linguistic form-meaning pairing) が最終的に達成されるのである。[encoding; 図1における③のプロセス]

このように類似構築モデルを提唱するとASLの形式と意味との類像性が生じるプロセスが詳細に見て取ることができる。ASLのたくさんの表現をこのモデルに当てはめて考察してゆくと、各段階で心的に操作されるイメージに多少の変化はあれど、形式と意味との動機付け (motivation) が発見できる¹¹⁾ わけだが、このモデルは世界各国の手話の、表現の一致点や相違点をいかに説明できるかについての仕組みを組み込んだモデルでなければ手話表現生成のプロセスを説明する強力な一般的モデルにはなりえない。次節では、この類似構築モデルが手話表現の文化的差異を説明する可能性を含むモデルとして読み解くことができることを示唆する。

1.2 二つのレベルの恣意性について

Taub (2001) を綿密に読解すると、指示物とASLとの間の類像性が達成されるまでのプロセスの中で、二つのレベルの恣意性 (arbitrary) が存在することが分かる。この恣意性とは、心的操作の各過程によって得られる概念やイメージがそれぞれの手話が属する文化によって異なるという意味であり、このような恣意性こそが手話表現を各言語間で不一致にさせる要因と考えることができる。以下にその要点をまとめておく。

1.2.1 Image selection における恣意性

- (1) Note that there are often a number of appropriate images to choose from, and the choice can vary from language to language and culture to culture.

The particular image used for a given language represents a choice made by the user(s) of the language who create that iconic item; that choice of image may be somewhat arbitrary (within the appropriate alternatives), but it becomes conventionally established in the language.

[Taub(2001;45)]

引用 (1) によると、イメージの選択のプロセスを経て得られた適切なイメージはその言語内で慣習的に確立されたその言語に特有の文化固有のイメージであり、そのイメージの選択は各言語間で恣意的である。例えば、初期概念 *tree* には多種多様な *tree* のイメージが存在するが、その中でも一つのイメージ (地面から幹が真っ直ぐ伸び枝が広がっている) が一般的な (適切な) 概念となり、ASL に特有の要素としてとして確立される。

1.2.2 Encoding における恣意性

(2) [E]ach language has its own set of conventionally chosen iconic “tools” for representing the pieces of schematized images. Snip snip -- Each tool consists of a link between a semantic category (e.g., “flat,” “branching,” “tall”) and a phonetic form (e.g., “horizontal forearm,” “spread hand,” “upright forearm”)

[Taub(2001;48)]

引用 (2) が示すように、スキーマ化されたイメージから手話に記号化されたそれぞれの構成要素は各言語間で共通のものであったりまた文化固有のものであったりする。例えば、ASL における V の形 (拳から人差し指と中指のみを伸ばす手形) は人間 (又は動物) の脚を表すが、日本の手話 (以下 JSL) においても同様である。それに対して、肘から指先を伸ばした状態は ASL では平らな表面を表すが、JSL においては平らな表面を表すのはこれに限らない。つまり、記号化の過程においても各言語内で恣意的に¹²⁾ イメージが操作されていることになる。

このイメージの選択や記号化に関わる文化固有の現象について、次節で基本的認知能力の観点から考えてみる。

1.3 Taub (2001) におけるメトニミーの扱い

まず, Taub (2001) におけるメトニミー (metonymy) の扱いを述べる前に, メトニミーについて定義しておく。¹³⁾

- (3) メトニミー[換喩]は…[中略]…参照点構造という認知的基盤を持つと一般化されるようになった (Langacker 1993)。すなわち, 認知的に際だったものを参照点 (例: 「電話をとった」の例では, 電話) として言語化し, それと関連する要素の集合の中から述語 (例: とる) と最も直接的に関連する要素 (例: 受話器) を目標として選び出し, それに注意の焦点を向けるようにするというわけである。 [野村 (2002;35-36)]

本稿では, 上記のような言語的指示関係のみならず, 参照点能力による一方で代表させて他方を指す関係を全てメトニミー的とみなすことにする。

さて, Taub (2001) において物体を表す類像的サインについて, メトニミーが関与することを示唆する記述を以下にまとめておく。

- (4) Frozen signs tend to represent a whole category, rather than a specific referent; the image that is chosen to represent the category can be a prototype or salient category member, or it can be an action or item *metonymically* associated with the category.

[Taub (2001;35), 斜体は本稿執筆者による]

引用 (4) において, 直前の文脈から “frozen signs” とは ASL の HOUSE (開いた両手の掌を親指以外の 4 指の先端で付け合わせ, 尖った屋根と側壁を描くように両手を斜めから下へ動かす; (8) の [図 5] 参照) を指しており, 様々な形状の家が現実には存在するが, それぞれの house を言い表す際, そのカテゴリー全般を代表する典型的なカテゴリーの成員として手形 HOUSE が選ばれることを説明している。この記述は, カテゴリーとその成員である個物との指示関係に関する記述であるが, 類似構築モデルにおけるどの段階でメトニミーが関与するかについて明示的に述べたものではない。次に,

(5) Selecting a single image to stand for a complex associated concept is an example of the cognitive process metonymy, ... [ibid;45]

引用 (5) の記述では、多種多様な具体的なイメージを含む初期概念からどのように単一のイメージを選択してゆくか (image selection のプロセス) について、メトニミーの一例であると示唆している。認知プロセスの観点から類似構築モデルを考察していることは有意義であるが、このような示唆は Taub (2001) の膨大な議論の中でここでしか見られない。

本稿では、類似構築モデルにおける各プロセスの中でメトニミーという認知プロセスの関与を重視し、メトニミーがそのモデルの中でいかに働いているかについて重点的に議論を進めてゆく。

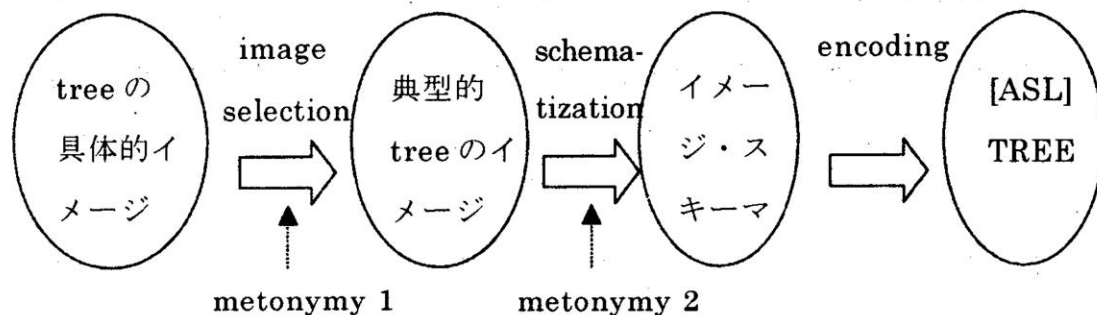
2. 事例研究

ここでは、ASL の中でも物体を表す表現を取り上げ、どのようなプロセスで ASL の手形が生成されるかについて類似構築モデルの観点から考察する。一見すると指示物が物体であれば単にその形状を手形に置き換えればよさそうだが、手話表現の生成の過程はそれほど単純なものではなく、それぞれの表現で様々な心的操作とイメージの形成が行われていることを例証する。さらに、手話表現が文化によって異なることの要因を探るべく、意味的に対応する JSL の表現の生成についても触れ、ASL と JSL の手形生成プロセスを比較検討してゆく。

(6) TREE

前出の図 1 (D) で示したように、ASL の TREE の手形は地面・幹・枝を類像的に表したものである。

[図 2]

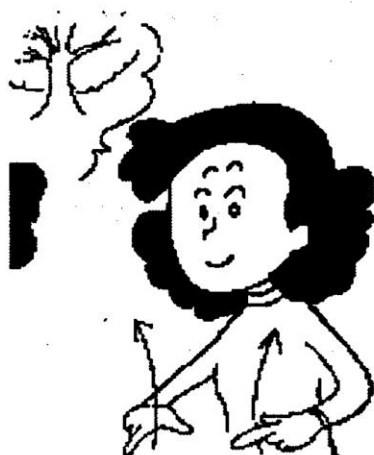


metonymy 1 : 庭に生えている比較的背の低い木から山脈にそびえたつ大きな木に至るまでより具体的で鮮明な様々な tree のイメージの中から、地面・幹・枝・葉などへ典型的 tree を表すイメージを抽出する。その心的操作は tree の典型的概念でもって様々な種類の木を指し示すことからメトニミー的である。

metonymy 2 : 地面・幹・枝以外のイメージの捨象。この3要素以外に tree の概念を正確に表すために必要と思われる構成要素は存在するが、スキーマ化の過程では手話の形態素からの制約により手形として表しきれない要素は捨象してゆく。スキーマ化された概念で典型的 tree の概念を指し示すことから、このプロセスも心的操作の1プロセスの中でメトニミー的である。

(7) 「木」

[図 3]

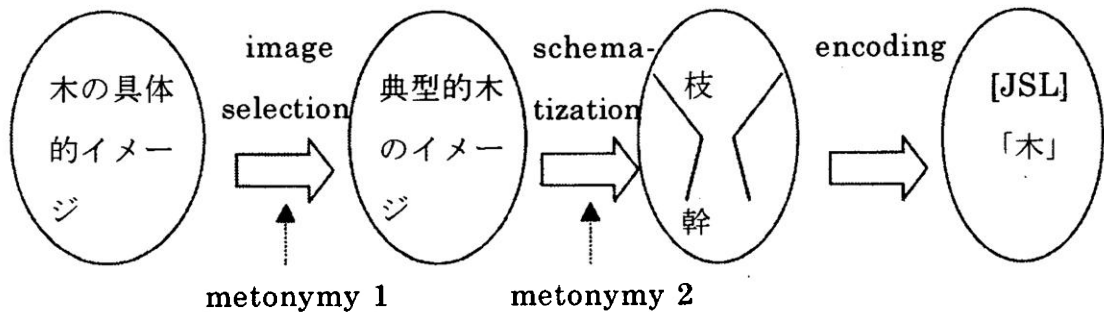


[手形] 両手親指と人差し指で木の幹を模写し、そのまま上方に左右に広げる

[語源] 木の幹が上へ枝を張っている状況

ASLと比較して興味深い点は、ASLでは地面を表す手形が含まれているのに対し、JSLでは幹と枝のみであること。¹⁴⁾

[図 4]



metonymy 1 : より具体的で鮮明な木のイメージから、地面・幹・枝・葉などへの木の典型的イメージの形成において必要とされるイメージの抽出。この段階ではまだ地面のイメージは捨象されていないと考える。典型的木のイメージ⇒個々の木のイメージの代表として表示（メトニミー的）。

metonymy 2 : 幹・枝以外のイメージの捨象。

幹・枝のイメージ・スキーマで典型的木のイメージを指し示す。部分→全体（メトニミー的）。

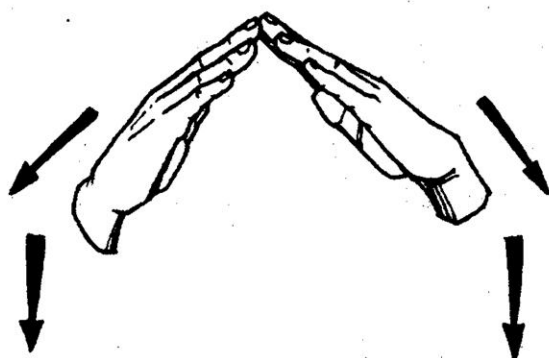
JSLの「木」に関して、手形は[図3]のように幹と枝のみを表したものであるが、ここで第1過程である **image selection** のプロセスで既に幹と枝にイメージが絞られているか（葉や地面のイメージは捨象されているか）どうかという疑問が生じる。結論から言うと、幹と枝へのイメージの絞込みはスキーマ化の過程で行われると考える方が妥当である。というのは、典型的イメージはある程度一般化された木のイメージであるが、幹・枝のみの木のイメージは構築しがたい。むしろ、JSLの形態素的制約によりスキーマ化の過程でこの幹・枝による木のイメージのみが抽出されたと考えるべきである。つまり、ASLとJSLの表現の違いはスキーマ化によって得られたイメージ（[図1]における(C)の段階）の異なりに起因する。

その証拠として、特殊な「木」であるJSLの「クリスマスツリー」の手形の生成過程が参考となる。クリスマスツリーの手形（両手の人差し指でもみの木のギザギザの形状の輪郭を描く）はツリー全体を表示するものではないが、イメージの選択の過程で幹のイメージを捨象したとは考えられない。

太い幹が存在しない典型的クリスマスツリーのイメージなど存在しないからである。この場合も、スキーマ化の過程でJSLの形態素的制約と参照点能力が起因して幹のイメージの捨象が行われていると考える。¹⁵⁾

(8) HOUSE

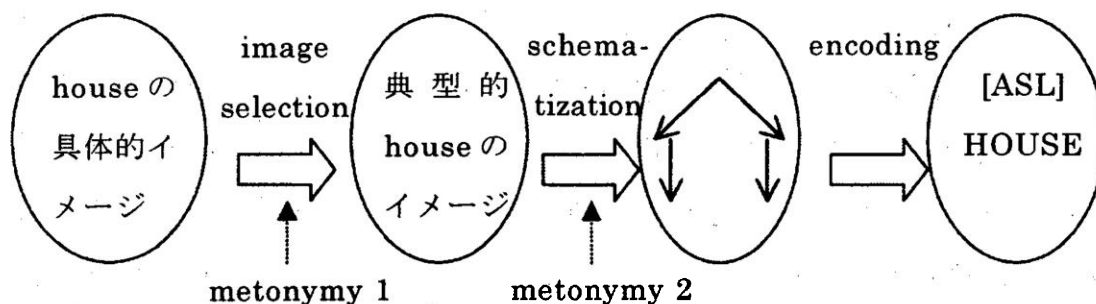
[図 5]



[手形]開いた両手の掌を親指以外の4指の先端で付け合わせ、尖った屋根と側壁を描くように両手を斜めから下へ動かす

ASLでは側壁まで表示している点が注目点である。

[図 6]



metonymy 1 : より具体的で鮮明な house のイメージから、屋根・壁・ドア・窓などへの house の典型的イメージ形成に必要な要素の抽出。代表例（部分）で様々な家の具体的イメージ全体を指し示すのでメトニミー的。（例えば、実際の屋根の形状は全ての家が尖っているわけではないので。）

metonymy 2 : 屋根・側壁以外のイメージの捨象。ASLの形態素的制約によりこの2要素で典型的な house のイメージを指示するのでメトニミー的。house にはドアのイメージは付き物であるがスキーマ化の過程で屋根と側壁のイメージのみへと抽象化されている。

(9)「家」

[図 7]



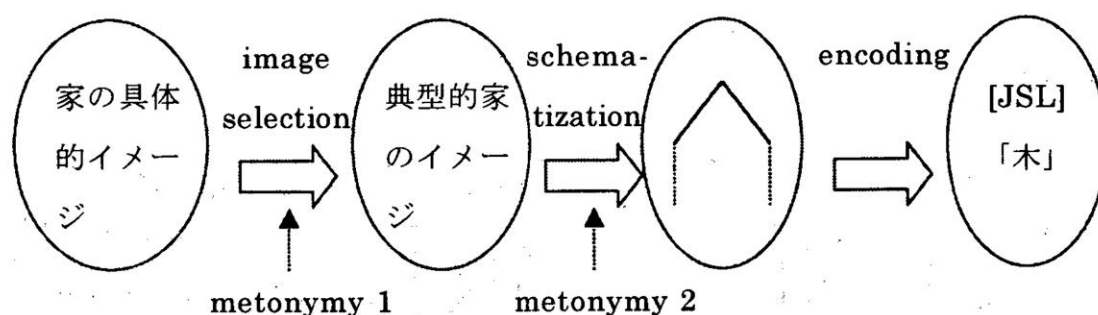
[手形]

両手 5 指を少し曲げ、胸元で対向させ屋根の形を作る。

[語源]

手話『家』日本家屋の屋根を模倣

[図 8]



metonymy 1 : 伝統的日本家屋からモダンな建築まで様々な家のより具体的で鮮明な家のイメージから、屋根・壁・玄関・窓などへの家が有する典型的（代表的）要素のイメージの抽出。

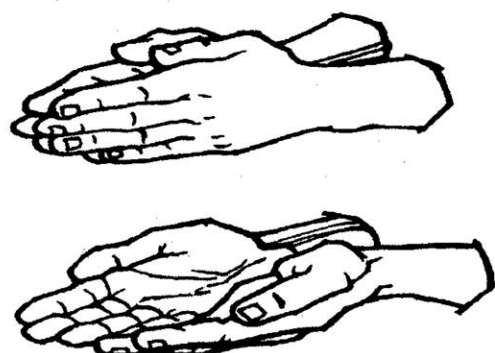
metonymy 2 : 屋根以外のイメージの捨象。結果的に、両手の 5 指を曲げた際に掌が垂直方向に向い合うことから外壁を表していると判断することもできる。

ASL では屋根から側壁にかけて手先で輪郭を描くことで手話として表しているのに対して、JSL では屋根のみの表示である。これらの表現の違いは記号化の過程において ASL では屋根から外壁にかけての輪郭を手先で描いているのに対し、JSL では日本家屋の屋根を類像的に両手の 5 指で代用していることに由来する。つまり記号化の過程では当然 ASL と JSL の形態素的制約により手話表現が異なることになるのだが、その基の要因はスキーマ

化のプロセスにおける構築されたイメージ・スキーマの異なりである。

(10) BOOK / 本

[図 9]

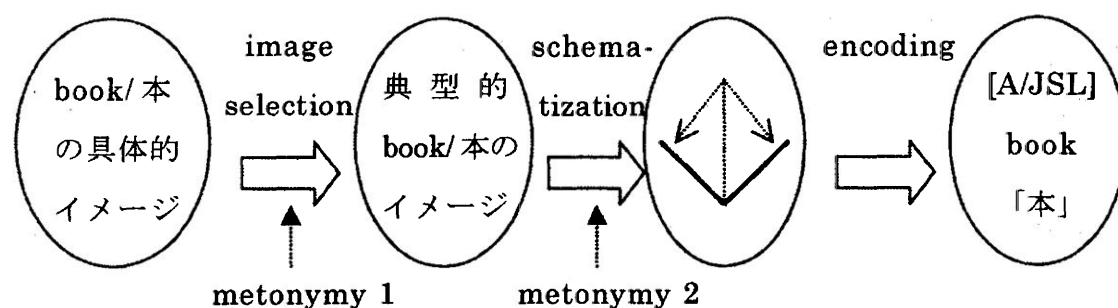


[手形]一度両手の掌を合わせ、次にその掌を左右に開く。

[語源]本を開くさまから。

ASL と JSL で表現が一致していることが注目点。

[図 10]



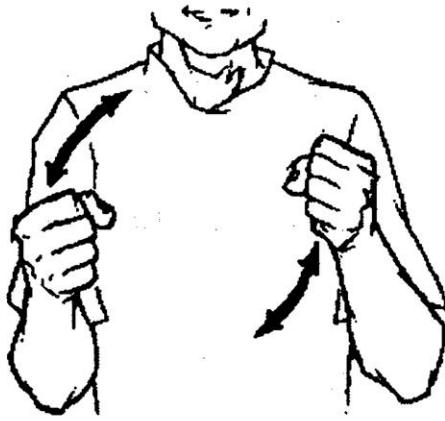
metonymy 1 : より具体的で鮮明な BOOK 又は「本」のイメージから、本の形状・表紙・ページ・本の取り扱い・機能などのイメージの抽出。

metonymy 2 : 本の形状・人の本への働きかけ (開く動作) 以外のイメージの捨象。

アメリカ手話 **BOOK** と日本の手話「本」は手形・動きとも共通している。文化的差異が出がちなスキーマ化の過程においても、日米で同様の心的操作とイメージの生成が行われるから同一手形が生じたと考えることができる。本への人の働きかけ (開く動作) は万国共通だからである。

(11) CAR・DRIVE

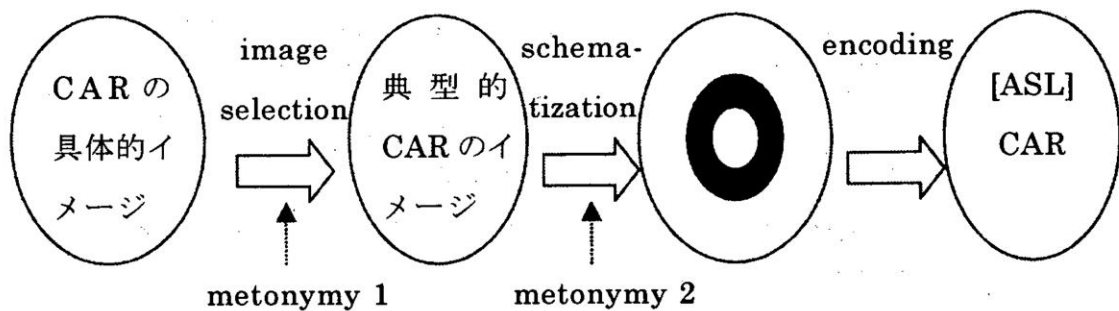
[図 11]



[手形] 握った拳を円を描くように動かす。

[語源] ハンドルを操作している様子。

[図 12]



metonymy 1 : より具体的で鮮明な個々の CAR のイメージから、車の形状・タイヤなどの車の主なパーツ・車の操作・機能などのイメージの抽出。

metonymy 2 : 車の操作 (steering wheel) 以外のイメージの捨象。car に関する概念で最も際立ったイメージはハンドル操作であるとみなし、円型のイメージスキーマを形成している。

(12) 「車」

[図 13]

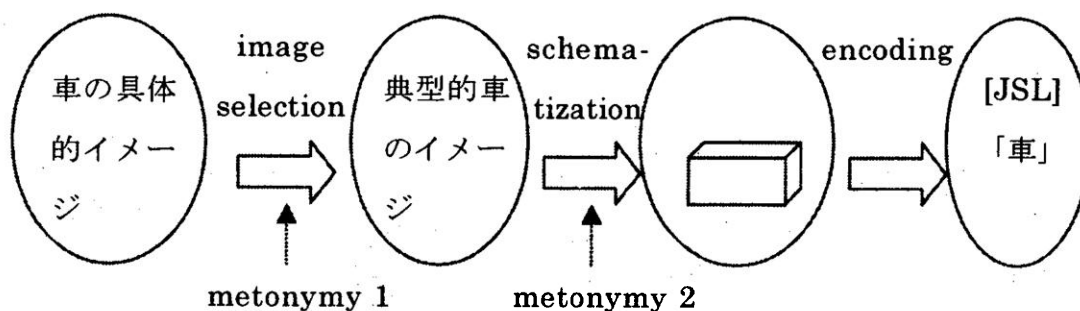


[手形] コの字型の手形を前方に動かす。

[語源] 自動車の外観の形状 (ボンネット)

JSLにおいても、ASLと同様の手形 (図 11) も使われる。

[図 14]



metonymy 1: より具体的で鮮明な「車」のイメージから、車の形状・タイヤ・車の操作・機能などのイメージの抽出。

metonymy 2: 自動車の形状以外のイメージの捨象。

ASLではハンドル操作を手話で言語化している一方で、JSLでは車のボディの形状でもって言語化している。ASLとJSLの手話の形式の異なりは形態素的制約 (記号化の過程) の影響を受けるスキーマ化の過程でイメージの差異が生じ、結果的にASLとJSLの間のCAR・「車」の手話表現の異なりが生じる。

以上の議論から、類似構築モデルにおいて、それぞれの過程を挟む2つのイメージは相互依存的であり、一方のイメージ (心的操作の後のイメージ) で他方のイメージ (心的操作の前のイメージ) を指し示すというメトニミー関係があると考えることができる。また、記号化の過程において手話表現が異なるのは、各言語の形態素的制約によるもので至極当然のことであり、む

しろその根底にはその前過程のスキーマ化のプロセスによって生じたイメージの異なりが、記号化に影響を与えていると考える方が妥当である。

3. 結語

物体を表す手話の形成に関して、Taub (2001) が提唱する「類似構築モデル」(Analogue-Building Model) を援用することは有益である。このモデルは元々表現(形式)と意味との類像性を説明する手段として考案されたものであるが、それ以上の多くの発見を導くモデルである。

物体を手話で表す場合、単に指示物の形状を特定の手形で代用したりその輪郭を描くのみでよい印象を受けるかもしれないが、心的操作のレベルにおいてはそれほど単純なものではない。そのプロセスはまず、様々な状況の中で存在する、個々の指示物が持つ鮮明なイメージの中から典型的イメージをイメージ選択し、ついで得られたイメージを手話の形態素で表現できるようなスキーマに希薄化(抽象化)し、最後に得られたイメージ・スキーマが手話表現として記号化されている。

本稿では、若干の物体を表す手話表現を考察することにより、手話表現が各言語で異なったり一致したりする要因は類似構築モデルのそれぞれの過程における心的操作やそこから得られるイメージの異なりであると結論づけた。またそのような手話表現の差異や一致の根底にはメトニミーという認知能力が関わっていることも示唆した。これらのASLとJSLの比較から、Taub (2001) が指摘するようにメトニミーという認知的過程は類似構築モデルにおけるイメージの選択や記号化に影響するのみならず、スキーマ化の過程でも中心的役割を担っていると考えることができる。

残念ながら、本稿はASLとJSLの物理的手話表現を網羅的に分析したものではないので、アイディアの提案に留まっているが、さらなる詳細な分析や、感情表現のような抽象的概念など物体以外を表す手話表現の研究は今後の課題としたい。

注

1) Taub (2001) では、手話と手まねの本質的違いを認知的側面から指摘している。

(13) At this point, it is fruitful once again to compare linguistic iconicity and nonlinguistic mime or imitations. The two processes do resemble each other in many ways: Both are in fact analogue-building processes. But, the crucial difference is that *linguistic items are constrained to fit the semantic and phonetic categories of language*, whereas *mime is constrained only by the imitator's conceptualizing power and physical skills*.

[Taub(2001:55-56); 斜体は本稿執筆者による]

2) 本稿では、[図 1]における①・②・③のイメージ操作の各プロセスを「過程」と、(A)・(B)・(C) の生成される各イメージと (D) の手形を「段階」と呼んで説明をしてゆく。

3) ASL の手話表現の形式を大文字書きで表すことにする。

4) ASL の生成過程における操作される概念を小文字のイタリック体で表すことにする。

5) イメージの取捨選択によって得られる概念は、各言語内で慣習的に決まっています、そのカテゴリーの成員として典型的な (prototypical) ものが選ばれる。

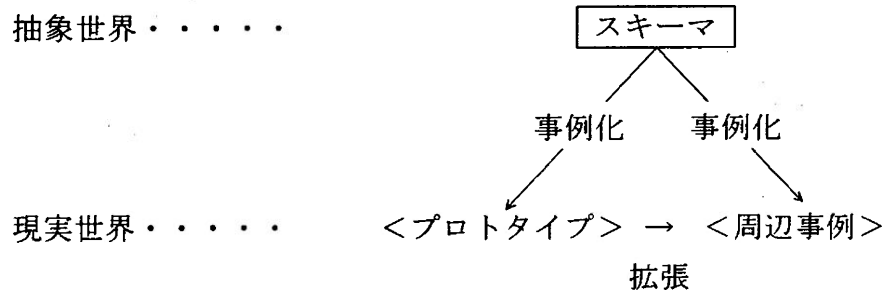
[Taub(2001:29)]

6) 適切なイメージ (appropriate image) は「木」のカテゴリーの中のプロトタイプ (代表例) として形成されるイメージと考えることができる。

7) スキーマ化とは典型的事例から周辺的事例に至るカテゴリーの成員全てに当てはまる抽象的枠組みを作り上げるプロセスである。吉村 (2004) によると、スキーマとプロトタイプやカテゴリー内のその他成員のとの関係は以下のとおりである。

(14) スキーマは、カテゴリーの全成員の個性に対応できるような抽象的な型です。プロトタイプはカテゴリーの中の代表例のことですから、スキーマをもっともよく事例化 (あるいは「具象化」: instantiate) した好例ということになります。中間例や周辺例を含むその他の成員は、スキーマの一部を事例化した応用例です。事例化とは、抽象的なスキーマを、具体化した事例に変える心のプロセスです。[中略]

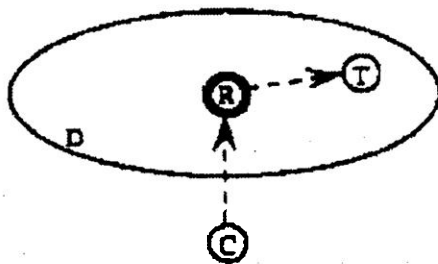
抽象世界・・・・



[中略] スキーマは日常の心的経験の繰り返しから生まれた認知の特性です。場面ごとの違いを超越した普遍性の高い知識の型です。ですから、スキーマ化は脱文脈化 (decontextualization) されています。

[吉村 (2004 : 49-52)]

- 8) [図 1] における (A) の段階のイメージを初期概念 (initial concept) *tree* と、(B) を二次的概念 *tree'* と、(C) を三次的概念 *tree''* と呼ぶことにする。
- 9) 選ばれる手話の形態素は各文化の中で慣習的に選択されている。
- 10) 手話表現は利き手に形態上、重要な要素を割り当てるが、本稿では優位な方の手を「一方の」と、非優位な方を「他方」と表現する。
- 11) image selection, schematization, encoding のそれぞれのプロセスで左右に位置する 2 つのイメージは当初の概念の構造を保持する形で写像される (structure-preserving mapping)。[Taub(2001:46)]
- 12) encoding の過程における恣意性は、それぞれの文化の手話の形態素による制約に起因するものであり、各言語によって記号化は恣意的であれ、言語内では形式と指示物との間には十分動機付けがあると考えられることができる。
- 13) Langacker (1993 : 6) によると、参照点能力を以下の図を用いて説明している。



——Langacker (1993: 6)

Cは概念化者（話者又は聴者）、Rは参照点 (reference-point)、Tは実際に指し示されるターゲットである。楕円形の領域 D は参照点 R の支配域 (dominion) を示す。人は、ある目立ったものを目印 (参照点) にして、それ

に近接する（支配域内にある）ターゲットへ心的走査することができる。ここで重要なのは、参照点は概念化者にとって際立つ存在であることである。また、参照点とターゲットの物理的・心的距離は離れすぎてはいけず、支配域内にある必要がある。このような参照点能力というものは、人間のより一般的な認知能力であり、様々な物の見方や行動に反映され、言語現象に限定されない。同様に吉村（2004）でも、以下のようにメトニミーを参照点能力を利用した認知過程として説明している。

- (15) メトニミーとは、認知言語学的には、次のように規定されています。すなわち、参照点を特定することで、それと直接的に関連する要素に注意の焦点を向けさせる認知過程ということです。参照点とは認知的に際立ったもののことで、いわば目印です。「冷蔵庫を開ける」「コンロを消す」では、参照点が「冷蔵庫」「コンロ」、直接的に関連する要素は「扉」「火」です。「扉」や「火」よりも、「冷蔵庫」や「コンロ」の方が大きくてすぐに認知できる対象ですので、それで代表して細かい部分である「扉」や「火」を指そうというわけです。【中略】ちなみに、「冷蔵庫を開ける」「コンロを消す」で「扉」や「火」に当たる要素をアクティブゾーン（＝活性化領域：active zone）と呼びます。プロファイルされるのは対象全体（「冷蔵庫」「コンロ」＝参照点）ですが、直接的に関係するのはその一部、つまりアクティブ・ゾーンの部分です。

[吉村（2004：110）]

本稿でも、参照点能力に基づく、部分－全体などに代表される焦点のずれを利用した指示関係をメトニミー的として扱ってゆくが、瀬戸（1997:69）では、「類と種」と関係に基づくものはメトニミーではなくシネクドキとして分類してる。

- (16) シネクドキーは、より大きなカテゴリーとより小さなカテゴリーとの間の包摂関係に基づく意味的伸縮現象である。 [瀬戸（1997:69）]

その根拠は、メトニミーが部分と全体の関係が実体 (Entity) の関係 (E 関係) であるのに対し、類と種の関係は概念的な範疇 (Category) の関係 (C 関係) であるとしている。

ただ、谷口（2003）が指摘するように、実体の E 関係と範疇の C 関係の区

別は境界線が曖昧である。

- (17) たとえば、「シェイクスピアを読んだ」のようなメトニミーは「著者と著作物」の関係に基づいているが、これが実体的であるか概念的であるかは、微妙である。「シェイクスピア」は特定の人物を指してはいるが、私たちにとってシェイクスピアは「実態」と言うよりはむしろ、16－17世紀イギリスの作家であるという知識上の人物であり、概念的な存在である。[谷口 (2003 : 125)]

以上の議論を踏まえて、本稿ではシネクドキとメトニミーは区別せず、概念的な包摂関係であっても、一方で他方を指し示しているプロセスを全てメトニミーとして扱う。手話表現と指示物とのメトニミー的關係についての詳細は島田 (2003;25-26) を参照のこと。

- 14) JSLの「木」はまず両手の親指と人差し指で幹の輪郭を描くことから出発し、軌道が上に向うにつれその手形が(幹の)輪郭をなぞる機能よりはむしろ指自体が枝のように振舞っていることが興味深い。この点は、ASLのTREEでは手形が最初から指で代用して枝を表しているのと対照的である。
- 15) 両手の人差し指でクリスマスツリーの形状を表しているわけだが、幹の形状までは表していない。針葉樹のギザギザ輪郭を描いた後真っ直ぐに両指を下ろせば幹も表すことが可能であるが、際立ったギザギザの形状でもってツリー全体を指示するとういメトニミーがここでも働いている。

参考文献

- Lane, Leonard G. 1991. *The Gallaudet Survival Guide to Signing*, Gallaudet University Press, 松島博 (訳) 『やさしいアメリカ手話』, リヨン社, 1991
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4.1: 1-38
- 野村益寛 2002. 「換喩／メトニミー」, 『認知言語学キーワード辞典』辻幸夫 (編), 研究社, pp35-36
- 瀬戸賢一 1997. 「拡大するメトニミー」 *KANSAI LINGUISTIC SOCIETY* 17, pp67-77, 関西言語学会
- 島田浩之 2003. 「日本の手話における比喩的拡張について」, 『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第25集
- 谷勇男 (編) 1988. 『手で話そう』KBS 京都

102 物体を表すアメリカ手話の類似構築モデルにおけるメトニミー…

谷口一美 2003. 『認知意味論の新展開メタファーとメトニミー』 研究社

Taub, Sarah F. 2001. *Language from the Body: Iconicity and Metaphor in American Sign Language*, Cambridge

米川明彦 (監) 1997. 『日本語 - 手話辞典』 日本ろうあ連盟

吉村公宏 2004. 『はじめての認知言語学』 研究社

website 及び画像の出典

<http://www1.kyoto-be.ne.jp/rou-s/hdstext/hdindex.htm>

<http://www.lifeprint.com/asl101/pages-layout/signs.htm>